

「10月1日は東京湾の日」川柳コンテスト 入賞句の選評

選評 審査委員長 稲田 眸子(いなだ・ぼうし)

「東京湾の日」を飾るにふさわしい力作揃いであった。「東京湾の日」大賞、秀作、佳作について選評を添えさせていただいた。選評者は、審査委員長の稲田眸子氏である。選句にあたっては「ユーモア感覚が表現されているか」「日常の喜怒哀楽が表現されているか」「社会風刺が表現されているか」「東京湾のテーマが表現されているか」「選者の心に響く作品か」をポイントとした。なお、過去3回に亘るコンクールにおいて発表された作品と類似していると判断された作品については、最終選考時に留意した。

記念品贈呈者:「東京湾の日・大賞」一般1名 キッズ1名、秀作3作 佳作6作
合計10作品

東京湾の日・大賞

<一般>

釣れたのはアジとスズキと今の彼

梅山 すみ江 神奈川県

<評>江戸湾の沿岸には縄文時代の貝塚がたくさんあり、これらの貝塚からいろいろな魚の骨や貝殻が見つかる。魚を捕まえる銚、ヤス、釣り針、網のオモリなどの道具類も出土しており、縄文人が江戸湾で食べていた江戸前の魚介類を概ね特定することができる。魚では、ボラ、クロダイ、アジ、スズキ、ハモ、コチなど。この句の中の「アジ」も「スズキ」も縄文時代から釣れていた魚らしい。高度経済成長期に東京湾の海域が衰退し、一時期これらの魚も釣れ難くなっていたが、関係者の地道な努力により回復してきている。作者は、独身の頃、ある若者に誘われ、東京湾で釣りを一緒に楽しんだのであろう。そのことを思い出しながら、呟いた言葉がこの句となった。「魚を釣る」は一般的な言葉遣いであるが、「人間を釣る」といった俗語を使ったことがこの句の眼目。ご主人が「今の彼」でなく「他の人」でなくてよかったね、そう声を掛けたい気持ちになったのはこの句の面白さであろう。「釣れたのは」「アジとスズキと」「今の彼」と弾むリズムは作者の心の景を表し、「アジ」と「スズキ」と「今の彼」とのリフレインは情感の高まりを表現している。ユーモア、喜怒哀楽、社会風刺、そして東京湾などのキーワードがこの句の中に見事にこめられた一句であり、迷わず大賞に推挙した。「東京湾の日」の川柳コンテストの大賞を飾るふさわしい作品である。

<キッズ>

東京わんほればあさがザックザク

松田 れい 千葉県

<評>「ある山里に心優しい老夫婦と、その隣人に欲張りで乱暴な老夫婦が住んでいました。優しい夫婦が傷ついた子犬を見つけて飼うことにし、わが子のように大切に育てました。あるとき犬は畑の土を掘りながら『ここ掘れワンワン』と鳴き始めました。驚いた老人が鍬で畑を掘ったところ、大判、小判が掘り出され、老夫婦は喜んで近所にも振る舞いました」といったあらすじの民話を読んだことがあるであろう。『花咲か爺』である。

この句を一読、その『花咲か爺』の一節を思い出した。その話は「それをねたんだ隣の老夫婦は、無理やり犬を連れ去り、財宝を探させようと虐待しました。しかし、指し示した場所から出てきたのは、期待はずれのガラクタでした…」と続く。鋭い社会風刺である。しかし、この句の作者はキッズであり、社会風刺的な気持ちはあまりなかったのかも知れない。

一時期、東京湾のアサリは激減し、そのことを嘆いていたが、関係者のひたむきな努力によって復活の兆しをみせている。「ザックザク」からは、キッズたちの喜びの声が聞こえてくるようだ。

◎秀作 3句

粋だねえその生き方が江戸前だ

秋谷 進 神奈川県

<評>「粋」とは、江戸時代に生まれた日本独自の美意識。「粋」の本質は、目立たずとも品の良さが滲み出ること、そして自然体でありながら洗練されていることにある。

「粋」の例としてよく出されるのが「旦那衆」。旦那衆は芸術や文化活動のパトロンとして多くの芸術家を支援したが、その支援はあくまでも裏方としてのものであり、自らの名声を高めることが目的ではなかった。質の高い着物や茶道具の選び方、文化活動への関わり方、そして人との付き合い方に至るまで、粋なスタイルを志向していた。派手さを避け、上質なものを選び、その中で自分らしさをさりげなく表現することを大切にした生き方であった。

東京湾で取れた魚介類という理由で「江戸前」と名付けるのではない。「粋」の精神に叶ったものが江戸前なんだよ、とこの句は諭している。見事な社会風刺である。

よく喋る妻を江戸前黙らせる

東 明彦 大阪府

〈評〉世の中には、社会的によく喋る人と無口な人がいる。よく喋る人の心理は「自分をもっと理解して欲しい」「褒められ認められたい」「沈黙が耐えられない」「楽しませようとしている」「ストレスを発散したい」「かまってほしい」などが込められているようだ。

この句の奥様はどのタイプであろうか。「自分をもっと理解して欲しい」「褒められ認められたい」「ストレスを発散したい」「かまってほしい」ということであれば、夫婦円満のために御主人はもっと努力をしなければ…。

この句の場合は、上記とやや趣が異なっている。「江戸前」のあまりの旨さが奥様を無口にしてしまったのである。「安心・美味しい・安い」をコンセプトにしている回転寿司に口が慣らされている奥様が、今日は二人の記念日を祝し、老舗の江戸前鮎店に坐っている情景を思い描いた。日常の喜怒哀楽が滲み出てくる一句。ユーモアもあり、心に染みる句である。

孤独死はなさそうな海魚類達

渡会 克男 千葉県

〈評〉誰にも気づかれないまま亡くなる「孤独死」。核家族化の進行に伴い、家族・親戚のつながりや隣近所の付き合いが希薄になる中、孤独死は誰にでも起こりうる問題になっている。阪神淡路大震災後、コミュニティとのつながりを失ったお年寄りの孤独死が相次いだことから、この問題が広く知られるようになった。最近では能登半島地震、全国各地で発生している豪雨災害。これらをきっかけに明らかになった、地域のつながりの希薄化と社会的孤立。それは都会においても見られる現象。高層化が進み、隣近所の顔が見えなくなるにつれ、孤独死が増えている。

そのような中、地域のつながりを取り戻すための新たな取り組みも始まっている。気兼ねない近所づきあいが始まれば、孤独死も減ってくることであろうが、その道はまだまだ険しい。高度経済成長期に行った大規模な埋立と工場排水や家庭雑排水によって活力を失ってしまった東京湾の海底にはヘドロがたまり、夏場は赤潮や青潮が発生するようになってしまった。これではとても魚は棲めない。衰退した東京湾を再生すべく動き始めた市民の地道な活動の結果、今ではかつての豊かな東京湾に甦りつつある。そんな東京湾を前に呟いた言葉が「孤独死はなさそうな海」である。鋭い社会風刺の眼力が捉えた景である。

◎佳作 6句

駆け引きや竿先のゆれマハゼの気

田中 萌子 千葉県

〈評〉「せっかくヒットさせた魚をバラしてしまった…」というのは、釣り人なら誰しものが経験することであろう。「早く魚を釣り上げたい」との思いから、必死にリールを巻いているシーンをよく見るが、魚とケンカせず、上手なファイトでいなすことがポイントだよと釣り名人は教えてくれる。この句は、釣り上げる前のマハゼと釣り人との微妙な駆け引きの景。

成長したマハゼはやや沖合の深場に居ることが多いのでリール竿を使って十～二十センチほど投げて釣るいわゆるチョイ投げの要領で釣るのがよいらしい。釣り竿の先端付近にクリップ付きの鈴を付けておくと魚が掛かって竿先が動くと鈴が鳴って魚が釣れた事を教えてくれるので便利であるが、この句は、直に駆け引きを楽しむことを主眼としたマハゼ釣りのようだ。

秋日の中、東京湾をフィールドとした一日。日常の喜怒哀楽の中の「喜」が感じられる句である。「駆け引き」という言葉には、程よい社会風刺が感じられる。

増やすのは税より干潟にしませんか

石川 新 東京都

〈評〉今行われている自民党総裁選でも増税の是非が争点の一つとなっている。特に選挙戦序盤から注目されたのは、四十三兆円の防衛費増額の財源を賄うため、既に閣議決定されている防衛増税を実施することの有無についての議論である。「需要が供給を上回る本来の物価安定目標に向かう形ができるまでは増税をすべきではない」というのが大勢のようであるが…。一方、政府税制調査会では「未来永劫、十%のままで日本の財政がもつとは思えない」「今後の高齢化の進展に合わせて、遅れることなく、消費税率の引き上げについて考えていく必要がある」といった意見が相次いで出ている。人口減の社会の中で、将来の社会保険料を抑制するためには、消費税を増税して対応していくべきだという主張である。

この句は「増やすのは税より干潟にしませんか」と呼びかける。かつての豊かな東京湾を取り戻すにはもっと干潟が必要だと指摘している。鋭い社会風刺の句ではあるが、「しませんか」とのソフトな表現にユーモアも感じられるのである。

鰻から穴子派になる江戸前寿司

堀水 芽依 東京都

〈評〉動物好きが集まった時、「猫派か犬派か」という言葉が姦しく交わされている。「猫派」の言い分は「猫は犬のように飼い主に媚びない」「野性的」だから好き。一方、「犬派」は「犬は賢い」「飼い主に従順」だから好き。どちらの言い分もそれぞれご尤も。

この句は「猫派か犬派か」ではなく、「江戸前寿司は鰻派か穴子派か」をテーマとしているところが面白い。「江戸前」は「鰻」から生まれた言葉。今の東京湾に流れ込む川は百を超えるほどあり、その中で、現在の東京都にあたる地域の河川を上り下りする鰻を「江戸前」の「鰻」と呼んでいたことに由来する。そのようなこともあり、江戸前寿司のネタは鰻が多かったが、最近では、タレを纏ったやや硬めのご飯に、やわらかな蒲焼きをのせた「うな重」が多くなった。

「おいしい鮓屋は穴子でわかる」と言われるほど、穴子は鮮度が命。穴子の特徴であるヌメリをしっかりと取り除き、丁寧に煮て、さらにツメを作り上げるという一連の作業はまさに鮓職人だけが成しうる技術。姿形は鰻に似ているが、鰻のような脂っこさがなく、やわらかな身、甘辛いツメの味も相まって、幼い子どもから年配層まで、広く愛されているのである。

江戸前のネタの変遷をユーモア交えて表現した一品。「おいしゅうございました」

東京湾育むいのちに金メダル

山野 大輔 大阪府

〈評〉かつては豊富な魚介類に恵まれた東京湾であったが、都市機能や産業や経済の発展を重視した結果、干潟の八割ほどが埋め立てられ、その海岸線はコンクリートのカミソリ護岸に覆われてしまい、結果、海の生物が棲むには厳しい東京湾に変貌してしまった。そのような中、市民を中心とした東京湾再生の取組みが始まり、今ではかつての豊かな東京湾を取り戻しつつある。

日本勢のメダルラッシュで沸いたパリオリンピックで、日本は四十五個ものメダルをとった。このメダル獲得数はアメリカ・中国に次いで世界第三位である。パリパラリンピックも日本選手の活躍は見事であった。番外ながら、「東京湾再生に取り組んできた仲間達に金メダルを授与しよう」と呼びかけた句。諸手を挙げて賛同したい。

らっしゃいと湾の魚が飛び跳ねる

藤原 重留 東京都

〈評〉「らっしゃい！」。鮓屋の店内に入ると威勢のいい声が響き渡る。通されたカウンターの目の前のショーケースにはネタがずらり。メニューも豊富。この勢いが心地よい。ところで、海面を魚が飛び跳ねる理由をご存知であろうか。「体に付着した寄生虫を落とすため」「敵から逃げるため」「水面にいる餌を食べるため」「障害物を乗り越えるため」の四つらしい。それぞれ飛び方や高さ、飛距離などはケースによって異なるようである。この句は上記の理由に加え「よろこびを表わすため」を加えたいと言っている。久しぶりに東京湾を訪ねると「らっしゃい！」とばかりに魚が跳ねて迎え入れてくれたのである。その姿は東京湾の再生が進んでいる状況を喜んでいるようにも見える。ユーモアの溢れる一句である。

妻と湾いつも波なく凧がいい

井上 靖 神奈川県

〈評〉レオナルド・ダ・ヴィンチの言葉に「使わない鉄は錆びる。淀んだ水は腐り、寒さで凍結する。同様に、行動を起こさなければ、才能も朽ちていってしまう」がある。この句、「いつも波なく凧がいい」と表現している。本心からそう思っているのであろうか。淀んだ水は腐り、寒さで凍結してしまう。そうであるならば、「いつも」ではなく「時々」ぐらいが妥当な気もするが、いかがであろうか。すぐに喧嘩をするカップルは仲直りするのも早い。喧嘩も愛情表現の一つ。お互いを深く知っていくためのものなのである。「主婦業って楽だよな。朝、子供達を学校に見送って、洗濯掃除したら、帰ってくるまで昼寝三昧なんだろ(笑)」と言うご主人。筆者はそんな不埒な言葉を決して口にしない。妻に感謝の日々。それが家庭円満の秘訣。「共白髪」という言葉があるが、この言葉には夫婦ともに白髪になるまで添い遂げる長寿と、麻糸のように強い絆で結ばれた円満夫婦でいられるようにという願いが込められている。共に過ごした年月の中には、波風の立つ時もあったが、その年月こそが愛しいのである。ユーモアを交え、日常の喜怒哀楽を表現してくれている一句なのである。